

砂町水再生センター界隈の今昔

砂町水再生センター界隈といえ、江東区新砂、昔は砂村と呼ばれた地域です。

センターから二キロメートル程北側に小名木川が、旧中川から隅田川にかけて東西に流れています。小名木川より南の地域は深川地域も含めて、埋め立て・開拓された地域です。深川は主に江戸の塵芥によって埋め立てられ、砂村は湿地や浅瀬を開拓したものです。そしてその後には縦横に走るに掘割が残りました。

現在ではその掘割の多くが埋め立てられて道路に変わり、また親水公園として縮小されています。建物も高層化して掘割の姿も私たちの目には入らなくなっています。しかし、江戸時代初期に拓かれた運河の一つが今も立派に残っています。それが江東区最古の運河小名木川です。

今回は小名木川の旧中川口に近い都営新宿線東大島駅から歩いて見ることにしました。



小名木川

小名木川は江東区を横断する四千六百四十メートルの一級河川です。小名木川の名称の由来には諸説があつてはつきりしませんが、家康の命により小名木四郎兵衛という人が開削したからというのもその一つです。

この江戸時代初期の開発は、行徳から塩を江戸城へ運ぶためでした。尤もこのあたりが当時の海岸線で、既に航路があり、それを浚い水路として整備したようです。このため、中川左岸の船堀川（新川）の開削とあわせて短期間で完成しました。その後人口の増加に伴い、塩以外の多くの生活必需品をはじめ、多くの物資が諸国から江戸へ送られるようになりました。そのため、寛永六年（一六二九）には川幅の拡張も行われています。浚われた揚げ土は、早速埋め立てに使われたことでしょう。

河川を結ぶ閘門（こうもん）

駅から南に少し歩くと、大島・小松川公園があります。この少し南には日本化学の工場がありました。公園は土盛りされ小高い丘になっています。

公園のほどに半ば埋もれた状態で、小松川閘門が残っています。時代が下っても舟運は盛んに行われていましたが、荒川放水路（現荒川）の完成とともに河川間に水位差が生じて、船の運航に大きな障害となりました。そこで作られたのが小松川閘門です。閘門は水位を調整して船を通すため、前後に扉が設けられています。その一方がモニュメントのように残されているのです。



▲ 昭和5年に完成した小松川閘門

閘門の復活

荒川ロックゲート閘門は陸上交通の発達とともに、その役目を終え閉鎖されます。しかし再び水運が見直されます。平成七年（一九九五）の阪神大震災で陸上交通がマヒした際も水運が十分に機能し物資運送に役立つことから、これを教訓に国交省が建設、平成十七年（二〇〇五）完成したのが荒川ロックゲートです。

これにより三十年ぶりに荒川と小名木川と隅田川の船の往来が可能になりました。

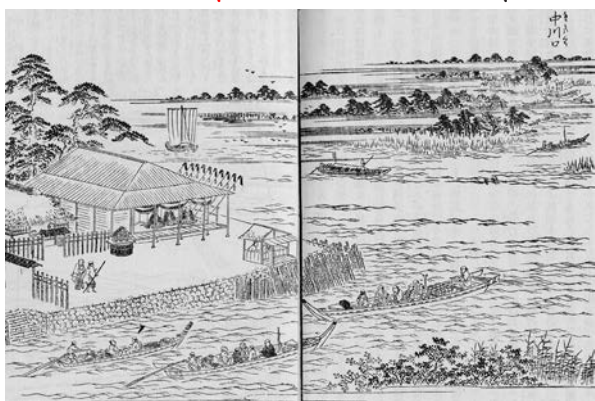
ロックゲート脇では、下水道局の小松川第二ポンプ所の建設工事が進められています。雨水増加に対応するため江東区亀戸、大島地区および江戸川区小松川地区の雨水を荒川に放流する施設です。

川の関所船番所

小名木川と旧中川の交わるところに、中川船番所資料館があります。ここには寛文元年（一六六一）から明治の始めまで凡そ二百年にわたって中川番所が置かれていました。



▲ 荒川ロックゲートと工事の進む小松川第二ポンプ所（右）



▲ 中川舟番所

資料館は、中川番所と水運などの資料を調査・収集・保存して展示するために建てられました。

小名木川は重要な水運路でしたから、幕府はこの川を通る船を取り締まるために船番所をおきました。

船番所とは幕府が設置した関所の一つで「入り鉄砲に出女」と船荷の点検・取り締りをした、言わば川の関所ともいえます。

番所の高札には通船時の作法や武器・武具の通行、女性の通行などを厳しく取り締まる事が記されていました。しかし、江戸時代は想像以上に女性が旅行をしています。この資料の中にも、行徳から江戸へ向かう小林一茶と同行した女性が、船頭に番所の裏の抜け道を教えられ、再びもとの船に乗ったと書かれています。これは「関所破り」ですが、国定忠治のようなアウトローの正面突破とは違い、幕府のメンツもつぶれず、大目に見られていたのではないのでしょうか。

砂村新田の開発

小名木川から南、砂村には十三の新田があり、開発者の名前が古地図上にも残されています。例えば八右衛門新田（北砂一、二丁目辺り）、又兵衛新田



▲ 嘉永三年絵図 木場から砂村にかけて

（東砂二丁目辺り）、砂村新田（南砂一〜七丁目、東砂八丁目辺り）などです。そのうち砂村新田は最も広く今の南砂のほぼ全域にわたる範囲を占めています。

砂村新田を開発したのは、相模国三浦郡から来た砂村新左衛門の一族でした。新左衛門は一族を率いて、江戸近郊の宝六島（現在の北砂と東砂の一部）から開拓します。宝六島とは海に面した洲のような島だったと考えられています。新左衛門はまずこれに目をつけ、



▲ 砂むら元八まん 広重

そこから開拓をはじめて広大な耕地をつくり、自分の姓を当てて砂村新田としました。ところがその面積が広く新田の代表的存在となったので、各新田を一括して砂村と呼ぶようになったのです。鎮守は富賀岡八幡（元八幡南砂七丁目）です。

新左衛門の残した家訓には、新田・新堤に六万六千本の松を公儀への冥加として植えた」と記しています。

右之松植立置候間為冥加之御公儀様え指上ケ申松也

元八幡を描いた江戸名所図会の挿絵にも、広重の名所江戸百景にも、海浜にある社と防潮堤には沢山の植えられた松が見えます。

元八幡

砂村には、かつて鎮守の富賀岡八幡宮があり、後に移転して深川富岡八幡宮となりました。残された跡地に、寛文五年（一六六五）八幡社を勧請して、元八幡と呼ばれるようになります。境内には富士塚もあります。富士塚とは

富士山を模した小型の人工山で、これに登ることで、本山に登るのと同じ功德が得られると考えたのです。

また、同神社は戦災で社務所の一部と神輿倉を残して全焼しましたが、倉の中から文化十年（一八一三）作の江戸神輿がみつかりました。現在本殿に安置されています。

砂村の野菜栽培

砂村の野菜栽培は、砂村新左衛門が三浦から種を持ってきて蒔いたのが始まりと伝えられています。砂村は江戸時代から代表的な野菜栽培の村でした。海の近いこのあたりは米作より野菜作りに向いていたのでしょう。東砂では、三十年ほど前まではあちこちに農地が残っていたそうです。

江戸近郊の農業地帯として発展したのは、江戸から出る糞尿、ごみ等の肥料が豊富に手に入ること、大消費地に水運を使って、迅速に生鮮食料品を運べたことによるでしょう。

代表的な作物としては、つまみ菜、亀戸大根、砂村葱、西瓜、



▲ 東砂3丁目付近の農家 昭和30年



▲ 富士山から運んで造った富士塚

砂村丸茄子、針ヶ谷胡瓜、砂村南瓜などです。

砂村の野菜をブランド商品として有名にした促成栽培です。

寛文年間（一六六七～七三）、松本久四郎という人が野菜の促成栽培を考え出します。日本橋の魚河岸から出る「江戸ごみ」を使った温床栽培で、踏み固めたごみの上に一年前のごみの腐敗したものを撒き発熱させる。これに種を蒔き保温する。このようにして育てた茄子や胡瓜などが季節に先立って出荷され、初物好みの江戸市民にもてはやされたのです。

現在の堆肥を使った有機農業とハウス栽培でしょうか。

江戸川柳に

砂村はかっぱで暮れの尻とふき

（砂村ではキュウリの売り上げで暮れの借金をはらった。これも促成栽培のおかげ？）

旧大石邸

南砂五丁目の仙台堀公園内に、江戸時代に東砂八丁目に建てられた区内最古の民家が移築・保存されています。安政の大地震（安政二年（一八五五））でも倒れなかったと言われています。砂村の野菜を栽培していた百五十年以前の農家の母屋の姿を見ることが出来ます。私たちの訪ねた時は、残念ながら公開日ではありませんでしたが、柵から手を出して写真を撮ってきました。



▲ 旧大石邸

四つ車大八

松本久四郎の墓は、子孫によって因速寺（東砂一丁目）に建立されました。同寺には歌舞伎で有名な四つ車大八の墓もあります。「め組の喧嘩」の力士です。文化三年（一八〇六）芝神明境内で勸進相撲興行中におきた、鳶職（め

組）と力士との喧嘩を題材とした芝居が当たり、四つ車の名も知られるようになりました。

産業の発達

明治時代にはいると、小名木川沿いに多くの工場が建てられるようになります。「富国強兵」、「殖産興業」が、明治前期のこの地にも押し寄せて来ます。

もともと小名木川沿いは大名屋敷などに船の出入りが盛んでしたが、それらの用地跡に人造肥料や精糖、製粉工場などが建てられます。



▲ 小名木川沿いに密集する工場群 明治時代中期

明治二十年現白河三丁目に東京紡績会社設立。

明治二十年、化学者高峰讓吉が財界有力者と東京人造肥料会社を設立。日本初の化学肥料の製造に成功します。

また、北砂五丁目団地の一隅には「我国精製糖発祥之地」と刻まれた碑が建っています。明治になって日本各地で精製糖の製造が試みられましたが、なかなかうまくいかず、明治二十三年鈴木藤三郎が、北砂五丁目にあつた鈴木精糖所で日本初の白砂糖の精製に成功しました。これが後の日本精糖会社です。

また、大島四丁目には日本製粉なども興り、製粉業も盛んになりました。

第一次世界大戦が勃発（大正三年（一九一四））すると、日本の商品は中国、インドなどに進出していきます。軍需物資の



▲ 我国精製糖発祥之地

注文もあり、日本経済は活況を呈し、紡績、製粉、精糖などの軽工業に加え製鋼、機械、化学などの重化学工業が盛んとなります。砂町地域にも日本製鋼、大島製鋼などが設立されていきます。

こうしてこの地域は、東京市民への野菜や魚介類を提供する地帯から、工場群の林立する工業地帯へ移行していったのです。

養魚池

金魚の養殖は、砂町・大島・亀戸地域で古くから行われていました。砂町辺りでは広い池で鯉、鰻などを養殖していましたが、大正の時代からは金魚の養殖が盛んになりました。昭和初期の地図からも砂町地域に養魚池が点在しているのが分かります。砂町が金魚の養殖に適していたのは、水に塩分がふくまれていて、病気になるにくく、さらに鉄分を含んでいたため、金魚の色が鮮やかになったからです。

しかし工業化の中で水質も変化し、池も埋め立てられ、業者は江戸川区の方へ移転していきました。昭和二十五年（一九五〇）には金魚池も消えていきます。「江東風土記」の中で最後に残った金魚池と紹介された、北砂五丁目の豊田園養魚池も今はありません。池は湿地となって、アシが生い茂っていました。



▲ 養魚池跡 後方は北砂5丁目団地

旧葛西橋

仙台堀川公園を離れ荒川に出てみます。そばに葛西橋が見えてきます。この橋は昭和四十四年（一九六三）に砂町と江戸川区を結ぶ橋として完成しています。

旧葛西橋は、この橋の三百メートルほど上流の清洲橋通りから荒川に架かっていました。荒川放水路が完成した後、工事が始まり昭和三年（一九二八）に完成しています。長さ九百九十メートルの木橋で、当時東京府内最長の橋でした。付近は荒川下流のハゼ釣り場として知られ、橋の上にも釣り人が絶えなかったそうです。

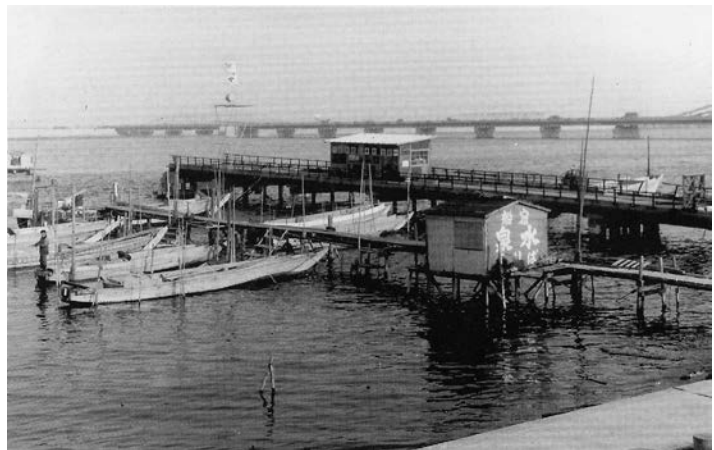
しかし、昭和二十五年（一九五〇）には崩落事故がおき、復旧されたもののその後、自動車は通行禁止となりました。

その後も人道橋として使用されましたが、葛西橋の完成で、その使命を終えました。

いねむすと鯉釣夫に踞（かが）み侍す

石田波郷

旧葛西橋付近で詠まれた句ですが、多い日には川辺にびっしりと釣り人が並んだそうです。



▲ 葛西橋と撤去中の旧葛西橋（手前） 昭和38年

工場の移転と団地建設

第二次大戦で江東区は壊滅的な被害を受け、砂町地域も見渡す限りの焦土と化します。

しかし、戦後の復興の中で人々は続々と戻り、工場も再建されていきます。その再建のさなか何度も台風の被害を受けます。特に昭和二十四年のキティ台風は通過が満潮と重なり異常な高潮が発生しました。

砂町南部の海岸堤防は決壊して、砂町の浸水は二・五メートルにも達したそうです。

この時、砂町污水処分場（当時）は南砂の地先で孤立。「給与も船で運ばれた」との思い出話を先輩から伺ったことがあります。

被害を大きくしたのは江東区が〇メートル地帯で、地盤が低いことが大きな要因です。明治時代以降、大工場が大量に地下水を汲み上げた事で、地盤沈下が進んだのです。

砂町地区で発生した公害といえば「夢の島のハエ騒動」が有名です。現在の夢の島は埋め立て完了後四十年ほど経過し、スポーツ施設や熱帯植物園などがある、区民の憩いの場となっています。しかし当時は生ゴミによる埋め立てを行っていて、昭和四十年六月に大量のハエが発生して南砂地域に來襲します。ネズミも集まり大挙して押し寄せたそうです。

ハエ騒動は夢の島全体を土砂で覆い、大掛かりな焼却で収まりました。

同じ頃地盤沈下もクローズアップされるなど、公害が大きな問題となりました。

こうした大都市部の産業や人口の集中、公害などに対応するため、昭和四十二年「公害対策基本法」、同四十四年「東京都公害防止条例」、昭和四十七年には「工場再配置促進法」などが施行されます。

これを契機に区内の大工場が移転し、団地や公園が整備されていきます。

工場跡地から団地に生まれ変わった主なところは

東芝…北砂五丁目団地

汽車会社…南砂二丁目団地

日槽製鋼…大島四丁目団地

三菱鋼材…大島六丁目団地

などがあります。いずれも二千戸から四千戸に及ぶ巨大団地です。この他、南部の埋立地にも辰巳団地・マンションなどが建てられています。さらに地下鉄東西線、新宿線が開通して、かつての工業地帯は都心部のベッドタウンへと変貌していきました。

洲崎球場

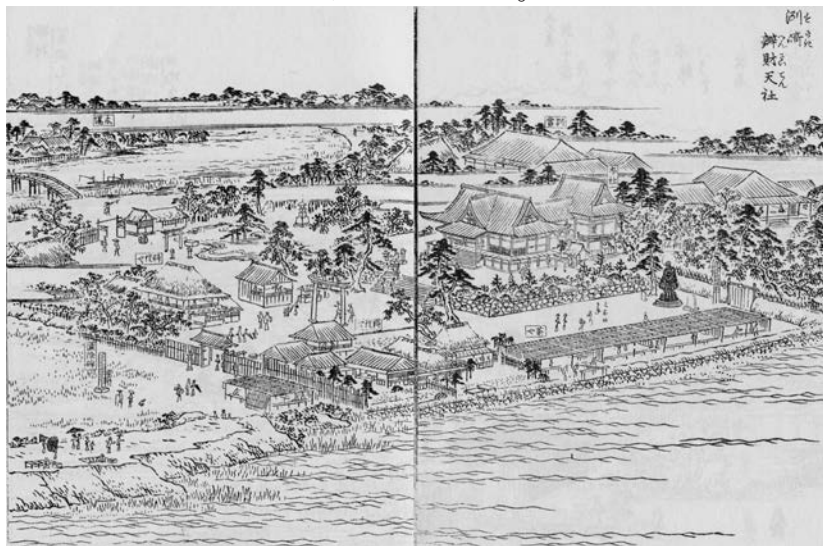
かつて砂町水再生センターでは、職員によって運営されていた通勤バスがありました。バスの運行途中に日槽橋をとおりましたが、この日槽橋の近くにかつてプロ野球の球場がありました。新砂一丁目江東運転免許試験場の前です。

昭和十一年プロ七球団による公式戦が始まりますが、東京にはプロが使用できる球場はありませんでした。そのため「大東京軍」の本拠地として、昭和十一年に三ヶ月という短期間で建設されました。

そして同年にリーグ戦、さ

らに巨人とタイガースによる初のプロ野球日本一決定戦が行なわれています。結果は、沢村栄治投手を擁する巨人が初代王座を獲得します。

元巨人の川上哲治さんの談話が残っています。「試合中に外野から水がしみ出し、三十分ほどでベンチまで浸かって試合が中止になった」。いかにも埋立地の突端らしい話です。昭和十二年に後樂園球場が落成すると、翌年に



▲ 洲崎弁天社 江戸名所図会

は廃止されます。

ウォーターフロント開発

洲崎とは、水流に運ばれた土砂が堆積した崎（先端）の事です。埋立てによつてできたウォーターフロントにも、その名が当てられました。

江戸時代に埋め立てられた洲崎は洲崎神社のあたりで、木場（現在の木場公園）の南側になります。さらに明治時代半ばには東側を埋立て、洲崎弁天町（今の東陽町一丁目）とします。ここには根津から移転してきた遊郭がありました。

そして、昭和の初めには野球場ができるまで埋立てが進んでいました。

戦後は十四号埋立地（夢の島）、十五号埋立地（若洲）と進み、離れ小島のようなあった砂町水再生センターも陸地の中に飲み込まれています。

若洲は広大な海浜公園となり、ゴルフ場、サイクリングロード、キャンプ場などに整備され、区主催のマラソンコースにもなっています。

江戸の昔、小名木川周辺から始まった埋立て開拓は、砂町の新田開発、深川の塵芥を中心とした埋立てを初めとして、延々と平成の現在まで続き、江東区の面積の広がりには明治時代以降からでも三倍を超えています。ウォーターフロント開発の歴史とも言えるでしょう。

（文責 高橋）

参考資料

- 「江東区史」 江東区
- 「江東区のあゆみ」 江東区
- 「江東風土記」 都教組江東支部
- 「江東歳時記」 石田波郷
- 「江東区の百」 郷土出版

探訪余話（砂村から砂町へ）

昔、砂村と呼ばれた地名は、新田の開拓者砂村新左衛門から付けられたものです。それが町制施行後、砂町となり、現在、北砂、南砂、東砂、新砂と分けられています。元来、固有名詞である砂村はそのまま残して、砂村町とすべきだったと思うのですが？